離縁します！～小話集～

おこた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

離縁します！～小話集～

【Ｎコード】

Ｎ９７６５Ｙ

【作者名】

おこた

【あらすじ】

この小話集は、「離縁します！」に感想を送っていただいた皆様へのお礼小話として作っていたものを、まとめてＵＰさせていただいております。タイミングを逃した小話や、お倉入りになっていた小話などもＵＰして行きますので、時系列、掲載順等は一切無視して頂けると嬉しいです。

目指すは●●使い？

目指すは●●使い？

妻「旦那さま、猛獣ですって」

夫「・・・」

妻「でも、旦那さまの場合は猛獣というよりも、ぬいぐるみですよね。髪もおひげもふさふさのふわふわで、ほっぺたに触ってもふかふかの感触ですし」

夫「・・・・・・」

妻「肌に触れているというよりも、ぬいぐるみの生地に触れてるみたいですよね」

夫「・・・・・・・・・」

妻「あ、ということは、私ぬいぐるみ使いを目指せばいいんですね！」

よっしゃ、がんばるぞーっ！

と、勢いをつけてこぶしを振り上げた妻の後ろで、夫が自分のひげに手を当てて何やら考え込んでいたとか、いなかったとか。

目指すは●●使い？（後書き）

こうして、おこたの妄想劇場が始まった、と（笑）

寝ぼけた自分とその顛末（夫視点）（前書き）

初の夫視点です！

寝ぼけた自分とその顛末（夫視点）

朝。
腕をとられる感触に反射的に相手を締め上げた。
いくら寝入っていたとはいえ、接触を許すなんて、以前なら決してしなかった油断。
自分の失態を自覚するよりも先に、接触した不審者を行動不能にするべく体が勝手に動いていた。
不審者は気づかぬうちに接触してきたとは思えないほど軽く取り押さえられ、柔らかな首に腕を押し当てただけで、抵抗どころか、身動きひとつしない。

・・・軽く？　柔らかい？

寝起きではっきりしなかった意識が一気に覚醒する。
腕を押し当てた相手は、数日前に妻になったばかりの、女性だった。
すぐに気絶してぐったりとしている体を引っ張り起こして活を入れ、意識を戻させた途端にひどく咳き込む小さな妻。
その儚げな様子に、ひどく狼狽えて、小さな背をさする。
なんてことを。
危うく自分の妻を絞め殺すところだった。
触れられるまで接近に気づかないもなにも、同じ寝台で休んでいるのだから、当たり前だ。
謝罪をしようと口を開きかけると、辛そうに呼吸を繰り返す妻が、

咳で潤んだ大きな目で見上げてきた。
言葉以上に雄弁に心情を語る妻の瞳に、疑問、驚愕、思案と次々に感情と思考の片鱗がよぎり、最終的に何かを決意したのが見て取れた。

「・・・今夜から、物置部屋で寝ます」

それから責めるでも怒るでもなく、淡々と物置部屋を片付けはじめ、昼に戻って来た時にはどこから見つけて来たのか、予備の寝具まで用意されていた。

妻は本気だ。

外に出て空を見上げると、この時期独特の暗雲が立ち込め始めている。間違いなく、夜が来る前に強い雨が降るだろう。風向きは西方。
それを確認して、家の外からちょっとした細工を施した。

その夜。

物置部屋の雨漏りと隙間風がひどいから、と妻はいつも通り同じ寝台で休むことを受け入れた。

・・・妻が俺に慣れるまで、細工を戻すつもりはない。

寝ぼけた自分とその顛末（夫視点）（後書き）

夫視点、需要があるかどうかも分からず、とにかく書きたかったから書いちゃった小話でした・・・。

もしも夫と妻が童話の登場人物だったなら・・・（前書き）

童話の中でキャラ達に自由に動いてもらおうと思ったのですが、ちょっと予想外のことが起きました・・・

もしも夫と妻が童話の登場人物だったなら・・・

？『赤ずきんちゃん』

配役

妻：赤ずきんちゃん

夫：オオカミ

妻「この配役、断固、拒否します！　どう考えても物語通りに赤ずきんが生き残れるとは思えません！」

夫「・・・」

妻「というか、旦那さま、赤ずきんちゃんのお話を知っているんですか？」

夫「（頷く）」

妻「え、じゃあ、最後にオオカミがどうなるかも？」

夫「（頷く）」

妻「・・・なんだか、もの凄く嫌な予感がするんですが。念のために、オオカミの結末がどうなるか言ってみてくれませんか？」

夫「満腹になる」

妻「なんで満腹で終わるんですか！？　いえ、ある意味、石で満腹になっているから合ってるのかも知れないですけど」

夫「（チラリと妻を見る）・・・」

妻「（ぞくっ）き、急に悪寒が・・・。だ、駄目です、オオカミが満腹満足で昼寝しているところしか思い浮かびませんっ！　すみませーんっ、物語チェンジで！！」

夫「・・・（妻に聞こえないように舌うち）」

？『シンデレラ』

配役
妻：シンデレラ
夫：王子様

妻「・・・旦那さまが、王子さま？」
夫「・・・」
妻「いえ、あの、私のイメージだと王子さまって爽やかでほっそりしてて、子供っぽいイメージがあるので。旦那さまの場合は、軍人さんとか狩人さんとかそういう力強くて厳しそうなイメージじゃないですか」
夫「・・・」
妻「衣装もなんだか旦那さまには小さそうですし。それに思ったんですけど、シンデレラが王子様を振り切ってうちに帰る場面、出来ませんよね？」

妻、まだ少し距離がある夫に背を向けて走り出そうとして、捕獲される。夫、ほぼ反射。

妻「ほら、やっぱり。離れててこれなのに、ダンス中の密着状態からなんて不可能もいいところです」
夫「・・・？」
妻「二人が出会うのは舞踏会ですから、ダンス中に鐘が鳴ってうち帰るんですよ、って、え、なんで衣装着始めているんですか、ちょっ、ああっ！？　やっぱり王子様の衣装は旦那様には小さいですねってダメ、ダメです、そんなに無理にひっぱったら衣装が破けちゃいますよっ！？」

夫、妻に止められて王子様役、断念。

?『ロミオとジュリエット』
※名場面のみ

配役
妻：ジュリエット
夫：ロミオ

妻「・・・う、うーん、これだったら場面が限定されていますし、大丈夫かな？」
夫「・・・」
妻「じゃあ、私はテラスに上がって、と。よし。旦那さまー、始めますよー、って、あれ？　旦那さま？」

さっきまで、こちらを見上げてスタンバイしていたはずの夫がいない。

妻「え、もしや私放置されちゃいまし・・・っ！？　・・・えーと、旦那さま？　壁を登ってきちゃったら、感動のシーンが、ただの逢引シーンになっちゃうんですが・・・」

息ひとつ乱さずにテラスの柵まで壁を登ってきた夫。

・・・結局、どの物語も始められませんでした。

もしも夫と妻が童話の登場人物だったなら・・・（後書き）

物語の枠の中で好き勝手動いてもらおうと思ったのに、まさか物語自体が始まらないとは・・・。

極秘任務：夫に無茶振りし、その反応を確認せよ！（前書き）

「妻（極秘部隊所属？）から無茶振りされたら夫はどうするか？」がテーマ（？）です！

極秘任務：夫に無茶振りし、その反応を確認せよ！

夫には内緒で所属した私の部隊から、極秘任務状が届きました。
初めての任務です！
わくわくどきどきしながらその内容を読んだ私は、思わず、任務状を床に叩きつけてしまいました。

「夫に無茶振り」って、どんだけ無茶振りですか！？

それ、私がやるんですよね？
念のため、床に叩きつけた任務状の表書きを確認しますが、間違いなく私宛になっています。私にやれといっています。
ターゲットが夫という時点で、限りなく失敗に終わる気がしないでもないのですが。
とはいえ、これは任務です。部隊に所属している以上、任務は絶対に遂行しなければなりません。
夫にとっての無茶振りって、どんなことでしょう？

さまざまな可能性を想定し、吟味し、私はいくつかの無茶振り作戦を用意しました。
作戦決行は、夫が帰宅した、その時です！

・・・夫が帰ってきません。

すでに普段の夕食時間を過ぎてしまっているのですが、夫が帰ってくる気配が全くありません。
なんなんでしょう、この物悲しさ。
すごく楽しみにしていたお出かけの日に大雨が降ってしまったよ

うな、このやるせなさは一体どうしたらいいのでしょうか。

せっかく、無茶振りをたくさん用意して待っていたのに。

覚書に書き付けた作戦計画書には、こう書かれています。

『夫への無茶振り計画！

？夫に晩御飯を作らせる！（※胃薬用意）

？夫にギャグを言わせる！（ふとんがふっとんだー、的な？）

？夫に一発芸をさせる！（宴会のネタ練習として）

？夫に歌わせる！（※候補曲：『聖歌第２４章』、『語れぬ物語』、わらべ歌『隣の隣はだーれ？』）

？夫を爆笑させる！（わきの下が狙い目？）

・

・

・

？夫に恋愛本の一節を朗読させる！（※候補：『愛の萌芽』Ｐ３６７、５行目）』

文字を追って小さくため息をつきました。

・・・夫が帰ってこなくて良かったっ！！

なんですか、この計画。一体誰が考えたんですか、いえ私が考えたんですけども。

いくら初任務で浮かれていたとはいえ、改めて考えると、これは無いです。

？の晩御飯を作らせるのも、いろんな意味で私の命にかかわってきますし、それ以外のどれもこれも、ある意味一番ダメージを受けるのは、私に違いありません。

この作戦を考えているときは、完璧な作戦群だ！　と自画自賛し

ていたはずなのですが。というか、？にいたっては、夫が見て赤面してしまうような極めつけの台詞を捜して、一冊丸々読み込んじゃっていましたし。

ノリって怖いです。

初任務を失敗どころか実行せずに終わってしまうのは非常に後ろめたいのですが、私の人生がかかっています。うん、任務状は見なかったことにしてしまいましょう！

私は任務状をしまって、夕食を作って食べ、先に休ませてもらうことにしました。

・・・ソファの上に、覚書を出しっぱなしにしていることを、忘れたまま。

翌朝。

朝に弱いはずの夫に、とても手の込んだ朝食を用意され、『愛の萌芽』Ｐ３６７、５行目からの文章を一字一句正確に暗誦された私は。

・・・絶叫を上げて逃亡し、捕獲されました。

極秘任務：夫に無茶振りし、その反応を確認せよ！（後書き）

クマさんは、意外とハイスペックだということが判明した一日。

7　夫を躾直します。爽やかにさせましょう。（夫視点）（前書き）

7話の夫視点です。
妻もいろいろ頭の中でしゃべっていますが、夫も結構いろいろたくらんでます（笑）

7　夫を躾直します。爽やかにさせましょう。（夫視点）

最近、妻の様子がおかしい。

急に話しかけてきたり、わがままを言いだしてみたり。何か欲しいものでもあるのかと思えば、そうでもないらしい。

何か心配事でもあるのか、時々見られていないと思ったときに考えこんでいる様子なのが気になるが、その原因は口にしようとしない。

そんな様子のおかしい妻が、俺の風呂あがりにハサミと櫛と剃刀を手に待っていた。

にこにことめったに見せないような可愛らしい満面の笑みで出迎える妻。その小さな手にはハサミと剃刀。

・・・なんだか、いろいろと残念だ。

妻が笑顔のままにじり寄ってくるところを見ると、どうやら、それらの道具一式は俺のために用意したものらしいことに気づいた。

とはいえ、剃刀はまずい。

小さな妻がハサミを持とうが包丁を持とうが全く気にならないが、剃刀はだめだ。

もし何かの拍子に俺が動いてしまったら、妻も無傷ではいられない。

ハサミや包丁なら、怪我をさせることなく取り上げることもできるが、刃を直接もつ剃刀は、どうしても怪我をさせてしまう可能性

がある。

さて、どうやって妻の意識をそらせるか。

ぐるりと室内を見回し、目についた椅子を妻の前に引っ張ってきて、当たり前のように座らせた。そのままの流れで妻から道具一式を取り上げても、妻は大きな目を不思議そうに瞬かせて、おとなしく座っている。

最近のやり取りの中で気付いたが、妻は、小動物の子供によく似ている。好奇心が強くて、臆病で。そのくせ、こちらが落ち着いて当たり前のようにふるまえば、それが当たり前なのか、と思い込む。多少の疑問は感じているようだが、拒否しない時点でこちらのもの。

無邪気な妻だ。

いつもまとめ上げている髪をほどいていくと、たっぷりとしたつややかな黒髪がうねりながら落ちてくる。

しっとりとした手触りの髪に、妻から回収した櫛を丁寧に通していけば、たったそれだけで、長い髪が滑らかに流れていく。

その感触を心地よく思いながら、ついでとばかりに妻に指圧を施してみた。

置いた俺の手が余るほど、薄い肩。

片手で指が回ってしまう、細い首。

指先だけで潰せてしまいそうな、小さな頭。

指圧が心地よいのか、うっとりと目を閉じていた妻の首から力が完全に抜ける。もう寝てしまったのか。

本当に、無防備な妻だ。

小さな体を抱き上げてやりながら、胸の内に、おかしさと慈しみともに、ほんの少しの苛立たしさが沸き起こる。こんなに何の警戒も無く寝てしまうなんて、よほど俺は信用されているのか。それとも、ただ、意識されていないだけなのか。

・・・それなら、いっそのこと・・・。

不穏な思考が湧き上がりかけたとき、腕の中で眠る妻が、頭を摺り寄せてきた。

無意識に甘えるような、その素振り。

起きている時には絶対にしない、その動き。

それと同時に、苛立ちと不穏な思考が、凶暴な何かとともに自分の中の奥深くへと戻っていく。

知らず詰めていた息を吐き出すと、丁寧に妻を寝台の奥側へ運んで、寝具をかけて、小さな頭をなでてから、寝室を出た。

居間に戻り、妻から取り上げた道具一式を片付けようとして、ふと、前に妻が言っていたことを思い出す。猛獣使いがどうの、という話をしていたときのことだ。

「髪もおひげもふさふさのふわふわで、ほっぺたに触ってもふかふかの感触ですし、肌に触れているというよりも、ぬいぐるみの生地に触れてるみたいですよね」

猛獣というか、ぬいぐるみっぽい。
人間以外のものに例えられることはよくあるが、生き物ですら無いものに似ていると言われたのは初めてだった。・・・しかも、ぬいぐるみ。
髪とヒゲがそう思わせるらしく、じゃあヒゲを剃ったら妻はどういう感想を持つのだろう、と思った記憶が蘇る。

別に髪もヒゲも気がついたら伸びていただけで、思い入れもない。そろそろうっとおしくなってきたし、これからどんどん暖かくなっていくから防寒の意味でも必要がない。

少し考えてから、ハサミと剃刀を手にとった。

目を覚ました妻がどう反応するだろう？
驚くか、笑うか。

・・・朝が楽しみだ。

妻が目を覚ました気配で目が覚める。いつもなら起きてすぐに腕に触れて起こしにかかるというのに、今日はなかなか起き出そうとしない。

どうしたのだろう？　とぼやける頭で考えたところで、いつも以上に、そっと、慎重に触れてくる小さな手。
感触を確かめるように何度か撫でられるのがくすぐったくて目を開けてみると、何かを真剣に考え込んでいる妻がいた。

その様子を眺めていると、やがて何かを決意したような顔になり、

ようやく目があった。
思考から戻ってきた妻と目が合うと、一気に顔が真っ赤になっていく。
離れていく手の温かさが惜しくて反射的に捕まえた。
細い腕。
こんなに小さくて細くて壊れやすそうなものが、当たり前のように動いている。ほんの少し力加減を間違えれば、たやすく折れてしまいそうな腕。
そんな繊細なものが、どうして俺のように無骨な男のそばにあるのかが不思議で夢を見ているような気もしたが、手のひらから伝わる少し低めの熱は確かに自分以外の温度。
もっとその温度を確かめたくて、捕まえた手のひらに顔を潜り込ませて息をつく。
温かい。
ヒゲを剃った分、直接温度を感じられるような気がして気分がいい。手のひらが次第に温かさを増していく。甘くて優しい、美味そうな香り。
「だ、旦那さまっ！？」
妻のあげた声に視線を向けると、真っ赤になった妻が困ったように眉尻を下げていた。
ああ、そうか。
「おはよう」

挨拶がまだだったな、と思い声をかければ、

「お、おはようございました！」

と、どこかやけくそ気味な返事が帰ってきた。

なんだか妙な挨拶だった気がするが、涙目になっている妻をみて、どうでも良くなった。挨拶が遅くなったから、怒っているのだろうか。腕を引っ張るような動きに、ああ、と思う。温かな手のひらから顔をあげると、妻がほっとしたように息をついた。

ちゅ。

ヒゲに邪魔されずに触れた妻の頬は滑らかで、唇にその柔らかさが直接伝わってくる。

ちゅ。

もう一度その感触を味わいたくて、すぐ反対の頬にキスを送る。真っ赤になっている妻の頬はいつも以上に熱く、つい、それよりも赤く染まる小さな唇に目が行ってしまう。

そこは、こちらよりも熱く甘いのだろうか。身を屈めようとして、妻が頬を抑えて寝具に埋もれてしまった。

少し、遅かったか。

さきほどみた鮮やかな赤を諦め切れず、そういえばまだ妻からのお返しを受けていないことに気づいた。掴んだままの細い手首を引っ張ると、寝具の隙間から、チラリ、と妻が濡れた目を向けて来る。

ぞくり、と背中に駆け上がるものを必死になだめながら当たり前のことのように、自分の頬を指で叩いて催促する。

妻の大きな瞳が驚いたように見開かれるが、ここで引いてはいけない。

あくまで、これは当然の習慣なのだという態度で頬を寄せて待てば、真っ赤になって小刻みに震えながらも、そっと妻の唇が最後の距離を埋める。

いつもと違う、直接肌に触れる、妻の唇。反対側の頬にも送られたその感触を噛み締めながら、心に誓った。

・・・これから毎晩、ヒゲを剃ろう。

7　夫を躾直します。爽やかにさせましょう。（夫視点）（後書き）

妻、狙われてる、狙われてる（笑）

これ、夫視点の連載を始めたら、そのまま転載しちゃうかも・・・。

妻、によによするの巻（前書き）

によによをテーマにしたら、こんな話が出来ました。

妻、によによするの巻

体の大きな夫用にと大きめのクッションを作ってみました。

元々夫の家にあったクッションも私にはかなり大きいのですが、夫にはちょっと小さいようでしたから。完成した新品クッションを両手で挟んでふかふかな感を堪能していると、ちょうど夫が入って来ました。

あ。いいことを思いつきました。

「旦那さま、旦那さま、ちょっとこれ持ってください！」

「・・・」

「あ、そうじゃなくて、両腕で押さえるような感じで、そう！　そうです！」

ソファに腰掛けた夫に完成したばかりのクッションの両端を腕で抱えるように、持たせてみました。

夫からちょっと離れて確認します。

・・・クマさんです。実家にいたクマさんのぬいぐるみそっくりなリアルクマさん（夫）がいますっ！！

元々よく似ているのですが、実家のクマさんは丸くてふかふかのお腹で、一方、夫は見るからに固そうな、柔らかさとは無縁の体つきです。

でも、こげ茶色のふかふかクッションを抱えた今の夫は、まさにクマさんっ！

うああっ、抱きつきたいです、そのふかふかなお腹の上でお昼寝

したいですっ。
熱心に眺めて内心で身悶えしている私が不思議だったのか、夫がこてっと首を傾げました。
ぐはっ！？
最近よく見かける仕草なのに、なんですか、この破壊力っ！　一瞬鼻血が出てくるかと思いました。
恐るべし、クッションマジック。そしてグッジョブ、私！
自分で自分を讃えていると、何を思ったのか夫がクッションを横に置いてしまいました。
ああっ！？　私のクマさんがっ！
思いっきりがっかりしていると、夫はちょっと考えるそぶりを見せ、またクッションを抱え直しました。
クマさんです。クマさんが帰ってきました！
もしかしたらまたすぐにクッションを置かれてしまうかもしれません。その前によく見ておかなければ、という使命感に燃えてにじりよると、その動きが夫を刺激したのか、素早くクッションから腕を伸ばした夫にあっさり捕獲されました。
何するんですか、これじゃクマさんが見れないじゃないですか！と憤りつつ体を起こそうとして、ふと、手のひらにふかふかな感触が。こげ茶色の、ふかふかクッションです。
・・・気持ちいい。
ちらり、と夫を見上げると、近くに置いていた本を手に取って読み始めるところでした。

あのー？　クッションも私も抱えられたままなのですが。
ああ、腕が長いから特に気にならないんですね。こんな大きなもの二つを全く気にしないなんて、さすが無い無い尽くしの夫です。
でも、まぁ、夫が気にしないなら、もうちょっと堪能しましょうか。
クッションと夫の腕に挟まれた状態で少し身動きしてちょうどいい位置に収まると、私は大きく息をついて目を閉じました。
あったかくてふかふかで、心地よい昼寝の時間です。
結局。
大きなクッションは私の愛用品になりました。
・・・ときどき、リアルクマさんのおまけがついたり、つかなかったり。

妻、によによするの巻（後書き）

妻のによによポイントは、やはりクマさんのようです（笑）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9765y/

離縁します！～小話集～

2011年12月19日03時00分発行